

|         |                                                                                                                                                                             |
|---------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 氏 名     | 島 中 陸 郎                                                                                                                                                                     |
|         | はたけ なか りく ろう                                                                                                                                                                |
| 学位の種類   | 医 学 博 士                                                                                                                                                                     |
| 学位記番号   | 論 医 博 第 598 号                                                                                                                                                               |
| 学位授与の日付 | 昭 和 50 年 5 月 23 日                                                                                                                                                           |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当                                                                                                                                                     |
| 学位論文題目  | <b>Experimental Studies and Clinical Application of<br/>Intrathoracal Biopsy using Thoracoscope and Tissue<br/>Adhesive</b><br>(胸腔鏡および組織接着剤を用いた胸腔内生検における基礎的<br>研究ならびに臨床的応用) |
| 論文調査委員  | (主 査)<br>教 授 佐川弥之助 教 授 日笠頼則 教 授 寺 松 孝                                                                                                                                       |

### 論 文 内 容 の 要 旨

従来の胸腔鏡下肺生検法は、生検後の出血と空気洩れを確実に止めることが困難で、そのため、有用な検査法であるにもかかわらず省みられなかった。そこで、出血に対しては、電気焼灼で止血し、空気洩れに対しては、組織接着剤（アルファ・シアノアクリレート）を塗布して、止めることを考案した。

基礎的実験で、この新しい方法の安全性を確かめると共に、技術的に容易であるか否かを検討するため、家兎を用いて、実験を行なった。この結果、空気洩れ、出血、感染、胸水貯溜、死亡などの合併症は全く無く、組織学的に検討を行なっても、肺の損傷は少ないことが判った。また、組織接着剤は、肉芽に囲繞されて、生検部を被覆した状態になり、脱落することはなかった。比較的大きな肺組織を生検した場合に、フィブリン膜を利用して、大量の組織接着剤を使わずに済む実験をも行ない、良好な結果を得た。

このような基礎的実験の結果から、充分臨床的に応用できる確信が出来たので、133例の臨床例に対して、本法を施行した。133例の術後の合併症は皆無といってよく、些かに一例が気胸に生じた。

本法施行により、肺癌、縦隔腫瘍、瀰漫性両側性肺炎患、胸膜炎、自然気胸、肺良性腫瘍などの鑑別診断、手術適応、治療方針の決定、治療効果の判定など多くの有用な情報を得ることができた。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

胸腔鏡、ことに胸腔鏡下肺生検は、術後の出血、空気洩れ等合併症が多く、現在迄ほとんど省みられなかった。しかし、現今、肺癌びまん性肺疾患を中心として、その診断に簡単でしかも安全性の高い肺生検法の必要性が痛感されている。著者は、胸腔鏡の簡便性に着目し、その合併症予防のため、組織接着剤（アルファ・シアノアクリレート）およびフィブリン膜を使用することを考察した。まず、基礎的実験として家兎を用いて、その安全性を確かめるとともに、技術的に容易であるか否かを検討したが、その結果、出血、空気洩れ感染等の合併症は皆無で、異物反応も少ないことがわかり、充分臨床的に応用しうる確信をえた。そこで、肺癌、びまん性肺疾患、縦隔腫瘍等、各種胸部疾患 133 例に本法を施行した。術後

の合併症は気胸 1 例を認めたのみであり，正確な病理診断をえることができた。本法の唯一の欠点は，遊離胸腔が存在しえなければならない点であるが，本法の施行によって，各種胸部疾患の鑑別診断，手術適応，治療方針の決定など多くの有用な情報をえることができる。

よって，本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。